

中学校家庭科「保育学習」における学びのプロセスの検討 —幼稚園で幼児の観察と触れ合い学習を行う授業を中心に—

What do junior high school students learn through the experience of playing with young children in childcare?

吉川 はる奈*

YOSHIKAWA Haruna

大関 さわ子**

OZEKI Sawako

藤島 鈴香***

FUJISHIMA Erika

【概要】 中学3年生を対象にした家庭科「幼児の生活と保育」の授業の中で幼児を観察したうえで行う触れ合い学習を通して学ぶ内容について検討した。特に前年度の保育を観察する授業をふまえて行った触れ合い学習体験である点を中心に考察した。中学生の記述を分析し、幼児と関わる際の戸惑いの内容と終了後幼児と関わることについてどのように考えるようになったかについて考察した。中学生は幼児の観察によって具体的な姿をイメージして遊びを行ったので、予想と異なる幼児の反応や行動に戸惑いが生じたが、特徴を詳細にとらえ、全体として子どもに対して子どもの立場にたって相手を個々で尊重する記載が目立つ結果となった。抽象的な表現はみられなかった。

【キーワード】 中学生、触れ合い体験学習、体験からの学び、幼児の観察

1. はじめに

昨今の中学生は、核家族で少ないきょうだいで育つ生徒が多く、他者と人間関係を構築し「人と関わる」ことが苦手である。中学3年生を対象に家庭科の「幼児の生活と保育」「幼児とのよりよいかかわり方を工夫しよう」の授業では、具体的な子どもの姿や特徴を生徒が幼児と実際に遊ぶ体験を通して学ぶことが行われているが、どのように事前に準備し、体験し、事後を学習するかによって、彼らが学ぶ内容は大きく異なることが予想される。

人と関わるのが苦手といわれる昨今の中学生が体験を通して「幼児とかかわる」ことを学び、考えるという実践では、どのように体験するかの検討は重要な課題である。本論では、学びのプロセスの検討として、前年度に事前学習として幼稚園での幼児の観察を行い、これをふまえて次年度に実施した幼児と遊ぶ体験的学習を通して、主体的に考えるようになった授業実践事例を通して、保育学習における学びのプロセスを検討する。

2. 対象と方法

事前の学習として、前年度に中学生が幼稚園で幼児の観察を行い、幼児の特徴や幼児が育つ場としての園という環境の特徴、幼児が生活の中で展開する活動にふれ、幼児の発達への関心、中学生としての自分のかかわり方への問題意識を高めた（詳細は大関ら(2019)）。その

後の家庭科の幼児の生活と保育の授業において、発達の基礎知識や関心のあるテーマについて学びを深めた。観察で得た事実や疑問、関心からテーマをもち、情報を収集し、発表するなど、着実に課題意識を学びにつなげていった。

本論は、2018年に幼児の観察学習を実施した中学生が、その後、幼児と遊ぶ体験的学習を通して、幼児にどのように働きかけ、体験的学習の中で中学生が気付いたことや戸惑ったことや感じたことを分析した。中学生が記述したふりかえりワークシートの記載や感想記述を分析した。（研究者2名で分析）幼児との触れ合い体験学習で行った遊びの中で生じた戸惑いと終了後に得た幼児への関わりポイントを中心に整理した。

なお授業の企画主旨、流れは以下の資料のとおりである。

まずは家庭科教諭が中学校の校内職員会議で企画提案を行い、企画内容、主旨など丁寧に説明し、全教職員に理解と協力を呼びかけ、実施の了承をえることができた。以下は説明の概要である。

* 埼玉大学教育学部生活創造講座

*** 埼玉大学教育学研究科

** 埼玉大学教育学部附属中学校

図1 授業の概要

附属幼稚園の幼児との中学生の触れ合い体験学習について

技術・家庭（家庭分野） 大関さわ子

技術・家庭（家庭分野）「家族・家庭生活」の学習において、附属幼稚園と連携し、中学生と幼児が触れ合う授業を計画・検討しています。協力：埼玉大学教育学部教授 吉川はる奈先生

1 はじめに

新学習指導要領における幼児との触れ合い体験学習の位置づけ

平成29年3月に文部科学省より告示された新学習指導要領技術・家庭（家庭分野）において、幼児との触れ合い体験学習について以下のように示されています。そのため、附属幼稚園と連携した授業を行い、幼児との触れ合い体験を実施させて頂きたいと考えています。

A 家族・家庭生活

(2) 幼児の生活と家族

ア 次のような知識を身に付けること。

(ア) 幼児の発達と生活の特徴が分かり、子供が育つ環境としての家族の役割について理解すること。

(イ) 幼児にとっての遊びの意義や幼児との関わり方について理解すること。

イ 幼児とのよりよい関わり方について考え、工夫すること。

(内容の取扱い)

ウ (2)については、幼稚園、保育所、認定こども園などの幼児の観察や幼児との触れ合いができるよう留意すること。アの(ア)については、幼児期における周囲との基本的な信頼関係や生活習慣の形成の重要性についても扱うこと。

2 日時および実施クラス

第1回目 幼稚園での幼児の姿の観察学習

平成30年2月下旬 3・4校時 2年A・B組【87名（男子44名 女子43名）】

平成30年2月下旬 3・4校時 2年C・D組【87名（男子44名 女子43名）】

※技術・家庭の授業内で実施。

第2回目 幼稚園での幼児との触れ合い学習

平成30年6月上旬 5・6校時 3年A・B組【87名（男子44名 女子43名）】

平成30年6月上旬 5・6校時 3年C・D組【87名（男子44名 女子43名）】

※日時の詳細は検討中

3 場所

埼玉大学教育学部附属幼稚園

4 引率者 附属中技術・家庭科 大関 さわ子、木村 僚

および埼玉大学 教授 吉川はる奈 その他教育学部学生、大学院生

4 ねらい

(1) 幼児と幼児に関わる人々の観察を通して、幼児の発達と生活の特徴、遊びの意義について理解する。
(第1回目)

(2) 幼児と一緒に遊ぶ活動を通して幼児とのよりよいかかわり方を考え工夫することができるようにする (第2回)

(3) 幼児にとって触れ合い体験学習の意義として：①中学生の遊びや動きから幼児の遊びの興味を広げること②年上の生徒が関わることで心の安定を得ることができるのではないか

次頁に続く

中学校家庭科「保育学習」における学びのプロセスの検討

5 第1回、第2回のふれあい体験学習のスケジュール		
第1回目 観察学習のスケジュール 平成30年2月 3・4校時		
時間	○生徒の活動	教師の動き (大関・木村・吉川)
10:40	○あいさつ ○生徒玄関前に集合・整列・点呼 ○諸連絡を聞く【持ち物】筆記用具、クリップボード ワークシート、上履き	諸連絡 (大関)
10:45	○附属中出発 徒歩で附属幼稚園へ向かう	先頭 (大関) 最後尾 (木村)
11:05	○附属幼稚園到着 ○整列・点呼 (場所: ホール)	
11:10	○ご挨拶をする ○諸連絡を聞く	飯泉園長先生ご挨拶 諸連絡 (副園長先生、大関)
11:15	○幼児と、幼稚園の先生方の関わりを中心に観察し、気付いたことをメモする。	※積極的に関わるのではなく、幼児の活動を妨げないように観察するよう留意させる。 ※課題を持って観察させる。
11:55	○集合・整列・点呼 (場所: ホール) ○お礼のご挨拶	諸連絡 (副園長先生、大関)
12:00	○附属幼稚園出発 徒歩で附属中学校へ向かう	先頭 (大関) 最後尾 (木村)
12:20	○附属中学校到着 ○生徒玄関に整列・点呼 ○振り返りをする。	
12:30	○あいさつ	
第2回目 幼児との触れ合い体験学習のスケジュール 平成30年6月 5・6校時		
時間	○生徒の活動	教師の動き (大関・木村・吉川)
12:50	○あいさつ ○生徒玄関前に集合・整列・点呼 ○諸連絡を聞く【持ち物】遊びに使用する物、筆記用具、クリップボード、ワークシート、上履き	諸連絡 (大関)
13:00	○附属中出発 徒歩で附属幼稚園へ向かう	先頭 (大関) 最後尾 (木村)
13:20	○附属幼稚園到着 ○整列・点呼 (場所: ホール)	
13:25	○ご挨拶をする ○諸連絡を聞く	飯泉園長先生ご挨拶 諸連絡 (副園長先生、大関)
13:30	○グループ毎に、指定された幼児のグループの部屋に行き、自己紹介したあと、子どもと関わってみる。気付いたことは適宜メモする。	※幼児の安全に留意し、活動を妨げないように触れ合い体験させる。 ※課題を持ってかかわる。事前に用意した遊びを使用しつつ幼児の反応を見ながら無理なく
13:50	○集合・整列・点呼 (場所: ホール) ○お礼のご挨拶	諸連絡 (副園長先生、大関)
14:00	○附属幼稚園出発 徒歩で附属中学校へ向かう	先頭 (大関) 最後尾 (木村)
14:20	○附属中学校到着 ○生徒玄関に整列・点呼 ○振り返りをする。	
14:30	○あいさつ	

3. 結果と考察

生徒は中学校から幼稚園に移動後、まず園長先生から諸注意を受け、中学生は4～5人のグループに、幼児は7～8人のグループに分かれ、中学生と幼児の1グループずつが組み、一緒に活動した。グループ毎に中学生が準備していた遊びは若干の違いがある。図1のスケジュールにそって、中学生は幼稚園で20分間幼児と遊んだ。再度集合して、お礼のあいさつをした後、中学校へ徒歩で帰る流れである。

以下では、紙面の都合上、ある1クラスの体験学習の様子と、生徒の振り返りシートの内容分析を中心に考察する。



図3 幼児に自己紹介する



図2 園長先生からの説明の様子

図2は園長先生から諸注意を聞く様子である。「安全面への配慮」や「幼稚園でしか見ることのできない園の特徴や工夫」にふれ、「しっかり学んでください」との言葉に中学生が真剣に聞いているのが印象的だった。その後、グループ毎に指定されたクラスに移動する。

1) 幼児と関わるときに生じる戸惑いカテゴリー分類

表1は中学生が幼児と関わったときに感じた戸惑いの内容を表している。全24件の記述が出され、2名で内容を検討し、4カテゴリーに分類することができた。(1)「予想と違う」戸惑い、(2)「幼児にあわせられない」戸惑い、(3)「幼児に伝わらない」戸惑い、(4)「わからない」戸惑い、である。

2) 「予想と異なる反応」への戸惑い

図3はクラスで対面した幼児に中学生がさっそく自己紹介しているところである。中学生は前年度の幼児の観察から幼児の反応を予想し、遊びや言葉かけを準備していた。ところが最初の自己紹介で幼児から思うような反応が返ってこず、戸惑う中学生は多かった。実際に中学生の戸惑いの記述として「ちゃんとことばを理解してくれるか緊張した。わかるようにゆっくりことばかけするのは難しい。中学生ならわかるはずなのに幼児だとわからないときがある」、「幼児にわかるよう

に話したつもり」が思うようにならず戸惑いを説明している。中学生ならわかるはずの言葉が幼児にはわからないという事実と直面し、「幼児にわかるように話す」ということの難しさと重要性を痛感したという。

その他にも話そうとしたら別の方に興味をもってしまった、他の遊びに目が向いてしまった、遊べないと言っていた子が楽しく遊んでいた、など「幼児の反応を予想して関わった」のに、「実際には異なる様子」に戸惑ったと記述していた。この予想と異なる反応への戸惑いは全体の記述のうち、最も多く42%を占めていた。予想をもって関わったり、準備したりという意味で、具体的に幼児と関わること、幼児の特徴への関心は高い様子がみられる。前年度、幼児の観察を幼稚園で行う授業を経験し、幼児の反応や姿を予測して関わったようだ。とはいえ、実際にはうまく予想どおりのことばかりではなく、予想と異なって戸惑うという場面も多く、それが、「予想と違う」カテゴリーの内容であったといえる。

表1 中学生が幼児と関わるときに感じる戸惑い内容

カテゴリー	件(%)	戸惑いの記述例
「予想と違う」	10(42)	自分から話そうとしてもあまり聞いてくれず、別の方向を向いてしまう子がいた。自分からその子の目をのぞき込んでみると顔をそらしてしまった
		他の班の遊びにこっちの班の子が興味がいってしまった。
		中学生が話しているのに別の方向を見ている子がいたけれど強くは言えないので躊躇してしまった
		「遊べない」と言っていた子が楽しく遊んでいた。言葉だけにとらわれなくて、本当はどうしたいかを考えて声をかけてあげるべきだった
		間を生んだことでその不安を幼児が感じてだまりこんでしまった。
		園児が少し困っていたときに自分も少し硬くなってしまいどう対処したらよいかとまどった
		幼児が皆と別のことをはじめたときにどうしたら同じことをしてもらえるのか分からなかった。「～してみてください」と言っても聞き入れてもらえなかった。
「合わせられない」	7(29)	ぼーっと立っている子に対して声をかけることはできたが、結局はみんなと同じことをやらせてしまった感じがした。
		遊びの進行を幼稚園生にうまくあわせられなかった。
		園児の目線の高さに合わせられなかった
		幼稚園生の立場になって遊びをうまく調整できなかった
		用具を片づけたりすることに夢中で、幼児本人に気を配れなかった
		20分だったので無理があったのかもしれないが、何をしたいか聞けばよかった
		その子の雰囲気や性格に合わせて接することができなかった
「伝わらない」	4(17)	ルールをうまく伝えられなかった
		反応に個人差があってひとりひとりへの話し方が上手に関われませんでした。
		こちらが緊張したら幼児にも伝わってしまった
		幼児に遠慮していると、幼児は不服そうだったので、自分も積極的に楽しんでいいと思った
「わからない」	3(5)	話しかけても反応がなかった子にどのように対応すればいいのかわからず戸惑ってしまった。
		恥ずかしがっていたのか怖がっていたのかわからなかった。
		はじめは何をすればいいのかわからなかった。

3) 「幼児に合わせられない」、「幼児に伝わらない」戸惑い

中学生が幼児ひとりひとりに「合わせられない」ことや「伝わらない」ことへの戸惑いも感じていた。「立っている子に声はかけても、結局、みんなと同じことをやらせてしまった感じがした」という記述には、幼児の関心、ペースをふまえず、同じことを要求してしまった感じを戸惑いとして表現している。

「伝わらなさ」の戸惑いも指摘している。ルールがうまく伝えられない、中学生にルールは説明して簡単に伝えるけれど、幼児には伝わらなかった。伝えるように伝えつつもりの戸惑いである。

4) 「わからない」戸惑い

「どうしていいかわからない」戸惑いもあった。何をしたらいいかわからず、対応できない。はっきり言って幼児が恥ずかしいのか、怖がっているのかわからない、などである。生徒も真剣に向き合おうとはしていたのだと推測できるが、正直にわからなかったと記述している。

5) 幼児の話をききながら遊びをすすめることへの奮闘

わずか20分間という短い時間の中で、中学生なりに試行錯誤し、奮闘していたことはうかがえる場面がある。図4は生徒が幼児の話をききながらすすめようとしている場面である。始めはやや一方的になりがちだった中学生が幼児の話をききながらすすめようと自然にグループが輪になっていく様子である。



図4 幼児の話をききすすめる

6) 中学生が幼児との触れ合い体験学習の中で気づいていく内容

表2は中学生が体験後に幼児との関わり方として導いたポイントである。記述は全25件あり、それを2名で検討した結果、4カテゴリーに分類することができたものである。

①「ひとりひとりに合わせる」②「幼児のいろいろな表現に注目する」③「自分も楽しむ」④「幼児がもつ考えを尊重する」の4カテゴリーである。

いずれも幼児と関わること、他者と関わる際に大切にしたい内容である。最も多かったのは「ひとりひとりに合わせる」という点である。彼らは口々にみんなひとりひとり違って、と記述し、感想としても述べていた。

教科書に記載のある、授業で教示された個人差やひとりひとりの特性の存在は実感として捉えられておらず、目の前の幼児に接し、予想と異なる個々人の違いを痛感した場面が多かったようだ。

さらにその中で着目したいのは、「助けすぎてもしすぎなくてもいけなくてひとりひとりの力にあわせて」という気づきである。中学生が幼児との触れ合い体験学習で陥りがちな失敗は、「力の弱い幼児に過剰に助けしてしまう存在」としての中学生としてのふるまいである。年少者へのかかわり方、力の加減の理解は重要な課題とされるが、本質的な理解のために、まず「幼児の力の尊重」が重要であるのは忘れてはならないだろう。

表2 中学生が体験後に幼児との関わり方として導いたポイント

	件(%)	記述例
ひとりひとりに合わせる	14(56)	<ul style="list-style-type: none"> ・助けすぎてもしすぎなくてもいけなくて一人ひとりの力に合わせてかかわることだと思う ・個人差もあるし、ひとりひとりに合ったかかわり方をしたい ・幼児もひとりひとり個性がある ・幼児とかかわるときには幼児の立場にたち、幼児の視線で考えていきたい ・幼児の気持ちを受け取って希望にそえるようにしたい ・相手の目線にあわせていくことがとっても大切だと思った ・年齢によって発達段階がありそれにあわせて遊びをしたい ・幼児の目線で回りをみて関わりたい ・幼児の目線に立って幼児の気持ちを考えながら接したい。
いろいろな表現に注目	5(20)	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児は全身で表現すると思いました。私たちが接するときは言葉に頼りすぎず幼児のからだの表現の仕方、特徴に目をむけるべきだと思った ・幼児は思ったよりも感情の変化が大きく全力で表そうとするのでよくみるようにする ・はっきり言って何を考えているか分からなかったけれど、幼児の動きや表情から少しでも理解していきたい ・よりよい関わりとは相手の性格や雰囲気をつまえて受け答えやしぐさを大事にしていくこと ・子どもの周囲もみて、今こまっていることはないか、周囲とトラブルがないかなども対応できるといいと思う
自分も楽しむ	4(16)	<ul style="list-style-type: none"> ・素直な幼児と接するにはこちらも素直な気持ちを持たなければと思った ・もっと自信をもって幼児にポジティブな声掛けをしたい ・幼児も褒められることは好き、幼児の感情を考えて接したいし、こちらも楽しむことが大事だと思った ・小さい子が困っていたら、これを機に自信をもって声をかけていきたい
幼児の考え尊重	2(8)	<ul style="list-style-type: none"> ・たとえ幼児でもひとりひとり考えている。幼児が今何を考えているか考えて関わりたい ・幼児は自分の意思が強い子が多いので傷つけずどうやって行動してもらおうか考える必要があると思った

7) 幼児を尊重して関わることへの気づき

図5は幼児が主張を明確にするようになっていく場面である。中学生の終了後の記述では「たとえ幼児でもひとりひとり考えている。ひとりひとりの考えがある。今、何を考えているかを考えてかかわりたい」としている。予想と異なる姿に戸惑い、言いたいことが思うように伝わらないことに苦労しながら、その中でひとりひとり異なる幼児の話聞き、幼児にも幼児なりの考えがある、と気づくのである。



図5 幼児が主張を明確に表明する

8) 幼児の主体的な力を実感して関わること

帰りの支度の場面で、印象的な中学生の様子である。幼児が靴を履き替えようとしている場面で周囲を中学生が背をかかめて、しかし手を出さずに見ている。幼児が、時間はかかるが自分ことは自分で行う姿は強く印象に残ったようだ。終了後の記述には、幼児も「自分でできる」「自分でやりたい」と思って生活していると思った。その具体的な場面として、帰りの支度や片づけなどの姿をあげ、時間はかかるが、自分でやってうれしそうだったと記述している。また「週末になるので、荷物をまとめて持ち帰る姿をみた。大きな荷物だったが、しっかり持ち運び迎えに来た家族に渡していた」「幼児はひとりではできないと思っていたが、時間はかかっても身支度を自分で行う。横で見ているだけでいいことも多い。幼児も自分の力でできると知った」としている。



図7 幼児が靴を履くのを見ている中学生

9) 幼児のさまざまな表現に着目して関わることに

気づく

新聞を使って幼児と遊んだあと、中学生は新聞で幼児と一緒に楽しめた、楽しめると語っている。終了後の記述には、「素直な幼児と関わるにはこちらも素直にならなければと思った」とか「もっと自分が楽しんでいいと思った」とも記述している。

さらに「幼児にはさまざまな表現がある」と記述しそのいろいろな表現に着目していくことで理解することが大切だと述べている。「幼児は全身で表現すると思った。私たちが接するときには言葉に頼りすぎず、幼児のからだの表現の仕方、特徴に目をむけるべきだと思った」「感情の変化が大きく全身で表そうとするのでよくみている」としている。なかなか気づくことができない部分に気づいたことに驚かされる。



図6 新聞紙を使って自由に遊ぶ

4. おわりに

中学生が幼児の観察をした上で、幼児との触れ合い体験学習を行い、主に次の4点を中心に多くの気づきを得て関わることに学ばず機会を得た。(1) 幼児ひとりひとりにあわせていくことが大切 (2) 幼児のいろいろな表現に注目して関わる大切 (3) 幼児も自分の意見や考えをもつ主体的な存在で幼児の考えを尊重することが大切 (4) 幼児と遊びの中で自分も一緒に楽しむことができる。

もちろんスムーズに導きだしたのではなく、前年に幼稚園での幼児の観察を行ったことで、幼児の姿を予想していた生徒が予想をもって関わる際にさまざまな戸惑いを持ち、その戸惑いに生徒自身が向き合い奮闘しながら導いたものである。

現代の中学生は、幼児の行動予測や応答の予想がイメージできずに関わるのがほとんどだという実情は危惧されている。過剰に幼児を守ろうとしたり、助けたり、逆に要求を高くしてしまうなど、失敗も多いといわれる。

本実践では、「幼児を観察すること」を事前の学習として取り入れることで、生徒にあらかじめ幼児の予想の姿が作られ、そのイメージをもちながら次年度のふれあい体験学習を行った。そのため、予想の姿が明確であり、その結果に対してしっかり向き合うことで、幼児とい

かに関わるかについて、多くのことを考え戸惑いに向き合いながら学ぶことができたといえるのではないか。

「幼児という存在を主体的な存在として尊重する」ことの大切さを理解した上で、幼児と関わるという人間関係の基本的な姿勢にもつながる理解をえることができたと推察する。

以上、現代の人間関係を構築することの脆弱さをもつ中学生が幼児の生活と保育について学ぶということはもちろん、将来の生活の主体者となりうる中学生自身が課題解決することのできる体験的なかわりを学ぶ学習として定着させていくことが必要ではないか。

今後の課題として、幼児の観察と実際の触れ合い学習をパッケージする実践を増やし、理解を広げていく情報発信が求められる。

【参考引用文献】

- ・大関さわ子・吉川はる奈 中学校家庭科における幼児の観察を用いた保育教育実践の検討 埼玉大学脅威教育学部附属教育実践総合センター紀要 17, 71-76(2019)
- ・中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説平成 29 年 7 月
- ・外山紀子・安藤智子・本山方子 生活の中の発達 新曜社 2019

【謝辞】

多くの理解と協力をいただきました附属中・附属幼稚園の先生方、皆様に感謝申し上げます。特に附属幼稚園の園長先生はじめ先生方、園児、保護者の皆さまには大変お世話になりました。この場をかりてお礼申し上げます。